



清稿

下

5  
1265  
3



J. Hadikane

38.10.50



綾錦卷之下

治涼緝

三十六番句合

一番

左

首歳不二

蓬萊やわさる秋のふふ山 露沾

月影の根をいさへさるふのふ  
すよりいさへさるふの根

右

春不二

名を問わく知るふかの花の雪 治涼

○新撰撰 月の根をいさへさるふのふ

○身延の石の記云わ井のよりより富まふふをえん

碧天雪白白雲間 走平兒童亦仰顔

東海初遊多少客 富山不取問何山



五番 左 くれ

をのう雲あんじらう雪を花雪 溶く

○丈本抄 同少げををのうせいのをのうなるを  
ちりて尺するふさくうら 後系抄

○後系抄 花のさうりかを至りの而又十日の時正  
よふお七のまらうとて立衣より七十昏おひき  
ぬりし子

右

花らおや 遠よ子の拾小壇の上 臣女

○枕草子 三つせりなるちこひ、それてといふ  
みらよいしちい、いさなりかひありけるをむきと  
よふつとておしけけるをういよとていふ

○末有 聖子養子而後嫁者也 大學

六番 左 くれ

今那とむうーゆるルヤ 山山々々 水戸相田氏 沾鱗

○新古今 後鳥羽院

様ゆくまふとふあふり尾のさうくー日もあふ  
いふくわ

○まうやえん花の那奈タうとて 宗祇

右

こみみえい目にゆりーこに様外 梅五

○詞卷 判を路くよりけくふる尺なまする  
同まらりしきまのまのちるゑ系我ん

七番 左 くれ

友乃跡さそい松にうあーおな 琴ヲ

あまのいりりけいそいのうなるよー











十六番 左 夕立

越前田中  
北仙南

夕立や 派のあつてまの湯氣 南花

○若葉春云 雨まじり 赤く死んでゆく

右

夕立や 一隅をぬき 武藏 沾涼

○菅家御集 夕立はあつてもあつても夕立は  
もろくもあつてもあつても夕立は

十七番 左 あり

歎乃身に骨ぬき 異さうね 一唐

○走獸ノ中チ家ノ耳ハ異ナリ 異物志云家ハ身數  
牛ニ倍ス鼻口ノ役ヲナス 馴良ニシテ教ヲ蒙

言ヲ亦トキハ跪ツク矣

右

石炭、て牛のあをの、要さか 梅五

○夏、日 橙、熱天 燥石 活法

○格物論云牛ノ母ヲ特ト云父ヲ牯ト云子ヲ犢ト云

○人ハ牛ノ角をさる人ハ馬をさる耳をさる

十八番 左 蟬 通茅屋

水戸

蟬のあつてまの湯氣 沾橋

○智度論云 春未夏初以時熱故小眠息除食患

右

蟬のあつてまの湯氣 沾涼

蟬の推のあつてまの湯氣 沾涼

下

十九番 左 移川

人乃自北か申の事も移川に如 逸志

世川の事東海にありし移川の事は移川にあり

○智度論云一切室中命為第一諸罪中殺生罪為第一諸善中不殺生戒為第一

右

白髪 移川にあり移川船 涼之

○莊子雜篇漁父 有漁父者下船而來鬚眉

交白披髮 掄袂行原以上

二十番 左 長北坂

かりきぬの扱もやまぬ器の外 水戸 沾渡

拾遺 一かたのめりて雄の心とひる君

○土史投 廿二丁目あり五丁目あり

右

主 丹波尺ありす行掛し 沾涼

○神社考云 玉城 白山 名愛宕 山 秀出 於 嵯峨 万仞之上

○三十二丁目 笹原と云あり丹波國眼下に

廿一番 左 一葉 扶父小川

園蔵して荷札を落す一葉外 沾楯

○淮南子 一葉落天下知秋

○千載 都よいましむる葉の心 沾涼

○東鑑云 文治五年七月廿九日 白河の園を











世二番 左

笠重いし 音のまろぐや 花元浩 音里

○白氏文集 与君結髪う五歳

○詩人玉屑 笠重いし 兵天雪 鞋い香い楚地花

右

髪い重いや 志いろはいめいの系柳 布仙

○若葉巻

うのいさるをのそんはへん人より  
うのちいさるうのうけそたのそあうら  
いあひたうらうのいをたていあてやまか  
二月の十日えらのち柳のこころ志ろはへん  
あひんはらしてうのいあひのあひろはへん  
さうのはもきうらうのいあひろはへん

世三番 左

我いゆり 枯いゆり 思いろやい九合酒 涼宇

○うらふ白沢

生あはるあひのいさるうのいさる  
あひのいさるうのいさるうのいさる  
いさるうのいさるうのいさるうのいさる  
いさるうのいさるうのいさるうのいさる

右

聖いハ 枯いゆりいのいさるうのいさるうのいさる 涼宇

○うらふ富士郡

あひの根いをいうのいさるうのいさるうのいさる  
○むら 岩城山 也り

あひの根いをいうのいさるうのいさるうのいさる

○うらふ 頼娃郡

あひの根いをいうのいさるうのいさるうのいさる  
あひの根いをいうのいさるうのいさるうのいさる



世四番 左 修ら

紀州若山

方圓のまゝを借ぬ銀竹の如 一軌

○丈木抄 法は井筒いけのうらむらりぬま

くまもろくまのかけぬ

○水、噴、方圓、器

右

凡、研、堂のちりまの法ら 梅五

風磨氷ラハ寒兒

○文選宋王風賦 其風中人狀直たやみこサヤ潜凄淋凜シラシラ

○新刺抄 みるゆめいふ井の海らひしきい

白のむらもあましくいづらん 夜系基後

○宗祇名不方角 以飯口より巖を 一里ありま

とりて坊あり蔵王堂いづくより縁のき井

○あり坊い蔵師のいよひつりい等り意を盡き東へ

世五番 左 修ら

未石

○無門関云 春有百花 秋有月 夏有涼風 冬有雪

○枕草子 ころの正月 二月 四月 七月 九月 十月

とびてりつゆつひとせかうか

右

すらくも 雪の樓乃廿何取馬 沾涼

○延喜式 凡諸国驛路邊植菓樹令往來人

得休息

○二里塚、鐵田信長史の三十六禽を表し、一里を

二十の所よさうめ家持のふりお松の頼む

松、一里をさうめ家持のふりお松の頼む

○松

世六番 左 歳暮

人ものし我も初んそとくひの暮 五百武

○荒木田守武世中百首

母の中の人をありと習ふまじきあはれなくともはるん

○西行賦云 花依風散人依友知惜

右

信濃なる歳暮車やうとらよ 沾冷

○流石湖の氷のうを梳くあそびも人馬はなす

○述異記河水始テ合ス狐先行テ後渡ルコトヲ得ル

狐河水渡ラントシテ水声ヲキイテ右スクルト

○世三十六番八句合ハシテを流シ清くはあはれ

昔古詩古哥古語以ハ句の心よりあはれなる

○他國宗匠大略

●貞徳 良徳 良保 常矩 又季吟門ト云

和及 竹亭 現暮四 石寄巻

柳とえくはあ葉移りたふ外 和及

そよ月夜至と聞そくくく 竹亭

下瀬や小巻の巻の腹すくま 京 暮四

●貞徳 梅盛 信徳 信安 神哥存 去交平

くまゆや梅子しあむし時西 信徳

ほろりたる涙の巻乃濁まま 京 信安

●露沾公 沾徳 現仙鶴

ゆきし年まねものあし五月雨 京 仙鶴

六貞徳 季吟 芭蕉 其角 現 淡く

糸さくくくさつらあまの雨 京 淡く

雪霽我以痛くよの昼間 蕉門 大坂 路通

名月や真秋杉原唐河 日 野牧

河さくさくさく 日門 尾名古原 露川

六宗因 西鶴 現 才店 舊徳翁

鮎ハ花ハ人如里もあらしを 言人 西鶴

妻ハ梅子みこりや小山伏 大坂 才店

六貞徳 室頼 現 鬼貫

吉野気のおもれてゆ 大坂 鬼貫

庭も海もみくさく 正秀門 大津 松篁

○伊賀上塾連

六貞徳 季吟 芭蕉 其角 現 原松 狸菴

本意如や女を入庭山 狸菴 原松

行をを何と 狸門 笑鴈

多海ハ茶ハ 日 菊而

業のよ如や本續 日 芥仙

熊蜂ハ 日 桐雛

三芳聖や花ハ 日 省我

神鳥を答じら 日 松甫

筆さく 根芽をさす 記之

天正年中伊賀久米郡主菊岡丹波行任眾

現 房行 池原 貴殿吏三夜男

行宜

菊岡隨性軒 号有叟如幻

行尚

畫程舎 以実名爲法名

現 行室

記之

和歌ヲ善ス

世談一統三百卷編書其外述作有多

現 行

有隣

伊賀

久米乃袖合山九品寺に存余の

碑を之とて之をく

性軒如幻

とありの神合ふまじくかかすの爲り

五十家之春沾源之と云ふ

菊岡

數百そのかひはらみ今朝の雲

行尚

題 映 賞

伊賀

うらむ才十鶴乃八考法間

菊岡

記之

享保十三申の御衣布地故の類くまはめて

伊賀 菊岡

糸種を尺をむはらの夏木立 有隣

故園今石もたりもろ 楓 布仙

○勢州山田

芭蕉門人

影之流く後ノ枝や昔ありし由

團友門山田

雲くはなれありのるる和時多 芦木

○紀列之連

須原 垣内

ふ里や一獨味口借しとんさ

環山

式人なめはよりあつてを

ひこよせく枝とくを柳しる 冬嶺

目よ於恨あゝささるる被る如  
 吹溜る雪の夕、やとれぬ酒  
 蟬鳴る菊をくさる栞か  
 山を越えて海東の西の東  
 又もや書はるる糸つるひ  
 びー干やむくく袖の糸糸糸  
 梶の葉の葉あやゆも流る  
 ぶけりたかかや果や葉の照り  
 鮎物に羊に成ほくさるる如  
 海辺の如  
 不月や魚子るるるる  
 舟よ女院巻を抱て月夜ふ

湯浅十田 鷺舟  
 守株  
 豊山  
 物奇  
 山茶井  
 鷺舟  
 環山  
 守株  
 豊山  
 冬嶺  
 山茶井

さるるおつる  
 深心の産物

積つていふよ時雨のさるる  
 一段天の  
 塩魚の荷より夕月の粟  
 海士の浮揚く鶴とぶんと浮  
 鎌を研つた馬馬の穂よさるる  
 菊と豆腐の仕や  
 菰入の先魚の成る大魚  
 裏吹巻のくさるる  
 切の言を鶴鶴にきくぬ事門  
 紙袍の枝一つくす神楽切

雪朝  
 沾涼  
 布仙  
 香乾  
 沾涼  
 布仙  
 雪朝  
 雪朝

八宗殿の悟通の庭らゆき  
舟を押し出さぬ屋は有  
儒者顔乃唐へらつて三四  
キももろれよもきせれ一  
目てつてはく道好の鶴は昆布  
もぬぬいひと羽扇綸中  
月の昼死の束は那ー男が  
機着へむくハ七三ろふ  
寺湯草藪屋高堺ハ北河金  
我ハハハハハハハハハハ  
欠ハハハハハハハハハハ  
比血尾ハハハハハハハハハハ

布仙  
々々々  
香期  
布仙  
香期  
布仙  
香期  
布仙  
香期

鳥江あり鶴ハ鳥ハハハハ  
海洲ハハハハハハハハハ  
聲ハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
蓬ハハハハハハハハハハハ  
拙ハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
所宅ハハハハハハハハハハ  
信馬東の抽子ハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
大ハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ

布仙  
々々々  
香期  
布仙  
香期  
布仙  
香期  
布仙  
香期

鳥

三

さあ板の五膳のうの乾花は茶  
世い知よ一御北二月三月  
布山  
北凉

題東叡山鐘

香満てい善さを香や甚五節

雪朝甥  
石内氏  
叙叟

師不知 松木氏 宗因門  
政則 青雲 同苗 蓮之 同苗 文雅 同苗  
長子 長子 長子

毛吹草  
花の散る後やみの星の梅はり  
政則

江戸八百員  
お宿り天物もさき一時を  
音雲

何人の度も度次を小求討  
神主の大根茹せて落葉  
蓮之  
文雅

七夕

七夕や藪の底は娘あり  
卜宅

挿とめて大繩を道に望乃あり  
梅宇

天は川がみの意川にまきこ川  
吳竹

心多を今看りてま婦望  
沾涼

傍て身も望も備し物由井沖津  
原之

煩悩を一夜に流せ天は川  
李條

一目を力そ涙を天乃川  
麟石

お後あ流の身なり幾長う銀河  
仙理

牽牛や枕のひびを老お母也  
素琴

庭根青の出てゑる今看守の覚  
左隣

涙ぬえ男もいれ星の川  
柵絃

朝顔

あさなほやうぐい茶後女竜田川  
物なほや朝麻の人の福の神  
あさなほや落美共の抱手桶  
卯龍や登子悪改の琴半  
あなほや傘後も地子干せ  
まふとこふとよみーを  
まふとこふとよみーのゆつとり  
あさなほや夕(をまふ女後の福  
朝なほやあさなほのまふもの  
朝なほやあさなほに星北花  
あさなほのあさなほに星北花  
鶴亀の跡の休あり土用干

琴月  
蓮之  
涼子  
嘉祥  
山丹

千翁門水光堂  
瓊角

一風  
有林  
桃翁門  
巾車

沾德門  
沾津

月

月光龍茶北何しめや細橋  
あさなほのあさなほのあさなほのあさなほ  
今を月やあさなほのあさなほのあさなほ  
あさなほのあさなほのあさなほのあさなほ  
里ハ文の頃子此谷岩中一外  
世界皆昼を樂屋よつあ月  
あさなほのあさなほのあさなほのあさなほ  
あさなほのあさなほのあさなほのあさなほ  
あさなほのあさなほのあさなほのあさなほ  
あさなほのあさなほのあさなほのあさなほ  
有明子夜や虫乃葉名り

逸志  
壽角  
卜宅  
丈岳  
魚路  
鶴史  
安祖  
夕佳  
有佐  
菰葉

大和郡山  
葉鹿門人



百補の白濁をくやせよの月  
 名月や海一とまよふ家如子  
 極目を同暈をたてよはせよの月  
 月洗や交差のつらう草也原  
 待る月の月ハ物くふ三の南雲  
 肉なまや仁王の後子流あり  
 多まよふおもてぬからう富士此月  
 感もろく片頬ゆるるは月  
 羊のしめと凍捕式部 十三夜  
 新月やわらぬ下あうな店  
 しくくわれ葉を—— 十三夜

竹裏  
 琴月 吉田氏  
 賀角 北尾氏  
 竹田  
 信州 三  
 仙魚 沾涼門  
 声玉 浪尾  
 陽秋 仙菓堂  
 五山

秦姓文岳稿

とろくのきのの中よまをきて月雅なるハ  
 多の凡雅如きハかろくし多なるハかろくし  
 くの多の凡雅如きハかろくし多なるハかろくし  
 よむなりうらひさしきく鳥けく——  
 風ハ諷し 其財く 雅ハ正し いさくり敷す  
 風ハ大凡雅なる早にうらひ人のうらひあまし海の  
 海雅ハ何のかりやあましきハ温和なるもの  
 或誰人湯浴のしびれを志のくその海なるは老翁  
 今の抱めてきよの夜をまよふる羊の鳴くことあ  
 七かきくもよかきく海をまよふる羊の鳴くことあ



福の中や花なんせりし  
角を足さく編む折殿  
そく鞠の形姿をとりし内の意  
出の枕とくばし柳さる  
ありく花ありぬきやと聖潤  
結姻の香もいさるせぬ梅  
居凡も一回事も泣荷は  
譲りし至り金の埋と  
魚の腹虚の扉し葉さる  
卵さるせし子より何し  
くがりをぬく遠さるの中は身  
又合点さるる力し竹の折

名さだてたさるは月十  
新の對の通具とくさる  
涼水八月をさる撥のみは  
是く月尺、をさるる角物  
圓形の蓋さる乃は紅のあらま  
日本の器の蓋は紅と  
白ぬとくは紅を織る  
之く抱付臨波く舟し  
小き湯氣はさるをさるし  
朝も月流紗袴のほきや  
柳織く能くくは花の信者  
柳さるさるさるし柳く

調和

月風和

江原氏 調和門 壺仙堂

先達と因て四十年來かゝぬ序を承るるの今も

蒼色にすく神をよみ神音本とくさ 風和

海より傳へ神と肉のまら 調和

夜梅

照るや梅多しと星のまら 調和

介我

月

我尚

破母代 総列造城住

周午

同苗 長子 同所

神くをよみおそくは 介我

月の輝や二月のまら 我尚

又よみは誓古の星と海と 周午

良夜

名月や影ハ帯白の人通玉 咫尺

羽鷺ハ多士ハ見事とくは月 沾涼

名月やらへくくならぬいせの海 猩

秋ハ野

清浪此一里ハ直き野まきい 魚路

惜もとここの海をまきく海ま首 東巴

唯よりりお葉撲野の積茶屋 倫仙

虚岳僧の下跡よりまらるおま 吟

手あるるおま 有舎

百姓の清とりのいれまら 沾雪

一城をえん 病の花まら

重陽菊

大陰を子粒の中ハ菊草

あまのつれ菊あまのつれ親の慈

長き林や一花の端れ菊の尺

きく霞一の塔遊なりき久島

暮色香の魚女をやきく酒

名のためよ多井顔いき菊花神

九年酒の月にも菊の菊

生植

晴む日や海あすくも葉野既

落葉下凌乃耳の小庭夜

かゆす藤小里いおきり推瓦

中く

千葉門  
雲浪堂  
龍角

感生舟  
鶴史

向井氏  
卜宅

結蔭舎  
英松

紫井翁  
沾涼

一瀬門  
雪朝

笠山

素丸

賀朝

上山

其遊

重南家士  
白菊

交月人  
調山

沾涼

調柯

五百武

智十

紀列若山  
一勢

水之住  
如水

氣歌

層の菊の幸に二階もあるも水波

層の菊の淵田の控柳の夕月外

花虫も笑ふよ一糸の菊を春り

侍者の枕しきしむし一の菊

層の菊や氣遠なる夕月廊

雑煉

音のくも曇籠りなるぬ秋の山

了して退り神はとふと放生會

露門  
龍泉舎

吟市

露岳

飛園 吾人色を出し入 磯の  
 ぬきへ 出く 乳い 赤海 通し 磯の  
 人ま 糸の人ま ぬきへ する あり あり  
 大ま ぎや けの 糸の けの けの けの  
 牛 橋を 又ら けの 罪を けの 音  
 新 酒や けの 路の けの けの けの  
 小 東 橋を けの けの けの けの  
 い けの けの けの けの けの けの  
 秋 月 けの 海 土も 敷す けの けの 浪  
 本 狭子 橋い あり あり あり あり あり  
 野 けの けの けの けの けの けの  
 秋 橋を 橋い あり あり あり あり あり

須貝氏 露庭  
 小野氏 鶴史  
 十公門 右月考  
 露門 美山堂  
 加島氏 好夕  
 千翁門 去月考  
 善角 快山  
 如雲  
 水戸任 仲山氏  
 市紅 沾橋  
 沾涼  
 雪朝

相引湯本よき

中 鶴 赤 ぬき けの けの けの けの けの けの  
 好 ぬき けの けの けの けの けの けの  
 有 けの けの けの けの けの けの  
 事 けの けの けの けの けの けの  
 白 中 けの けの けの けの けの けの  
 中 けの けの けの けの けの けの  
 山 けの けの けの けの けの けの

白中月よき

三島園沾涼始

一 布 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

荒蘭崎

五月の月をこぼりてゐる音 魚路

五石蔵のま夏を鳴りやふ代に鶴

鴨立沢 水くそあふふ

西沢の川魚をさしおきき

湯本 舟の角くとまらぬ身なま

小里舟の虫の尻葉角はあ

二子山

夕立しきりしと水舟月二子

箱根社

水にそり九尺の釜子も乗らぬ

講 僊

あつたは九輪にぬくあつた

妻も兼子も香梅かろり風

寒さけい大いささし鹿をさ

いれ舟すらのあつた五人

森あく水の浦日でも月も

柏子いさし鏡白く鶴

湯そあゆの生田やあつた

松若う富士をかめよか

くらんと見えとも花あつた

短と一度子味噌大豆の古

魚路 魚路 魚路 魚路 魚路 魚路 魚路 魚路

新葉しととんとおれ悟氣止  
 裾きんぐりの吹上り松  
 塩味の串魚焼く舟は返  
 いとよ味を抹香の白  
 隅へ醜乃其のゆづ里金  
 くれ梅干しや那村の鞠  
 物の心の記よきうり海七里  
 多ききゑる六ら月又ら月  
 作保娘乃未、妹 姦と 嫁  
 海をうけぬの遣接ほころひ  
 単鞋をほころひくも一と  
 茶酒餅飯ととつら口の花

魚 魚 魚 魚 魚  
 沽 沽 沽 沽 沽

昔はあま里敷うる子合ふ天を  
 目尺子目尺え 目尺を 返して  
 月顔ひまんころくハ齧のまは  
 何しやう白ふかぢの娘むらさ  
 そろそろと摺新事く四條通り  
 棒くほむるハ女ののりハ  
 煙波の裏ハ馬さうりま此肯  
 ちりふてむす村乃新並  
 學者はくまやうの女街のまは  
 少く下々る御母も少り袖  
 中々手の手藤よりぬが影さ  
 葉を扱出ス 波多野 下 根

魚 魚 魚 魚 魚  
 沽 沽 沽 沽 沽



上はせして...の系は...の人 16  
おやの...も... 去...一時

西園の...  
秋本ぬと...  
介我門...  
梁技

五常

仁 相傘の六分... 千翁息  
義 いろく... 不局  
禮 足ッ... 玲角  
智 燕久... 奇角  
信 君... 辰角

玄措

後リ初格の長... 露沾

小春

拈入乃代... 猩  
一休の袖下鼻... 調柯

時雨

藤卷... 雪朝  
全堂... 賀朝  
葛樹... 柙塙  
ふ... 千翁  
竹... 善珠  
ま... 調山

〇下

〇三三

霜 氷

まの霜や馬さへ喰ぬ草は  
若てもく蝸蚓もん糸の懸り  
ゆるゆるの  
ゆるゆるの  
立雪のまのしりしりぬ氷の如

冬 川

入水をおびはくしや河原  
帯の如き水のさびきや後し  
よとそい金の蓋なり冬は川  
川面うのぬき物なき一杭の上  
白鷺乃れ又長一水り川  
牧方の鳴きなき一夜食舟

穀我  
英松  
周岐  
竹裏

丹志

吳竹

東止

沾涼

臣女

泉竜

落 葉

果は皆佛一乃通子落葉外  
入相子撞のこきれて落葉う如  
頃日の下弦子音如き木の葉外  
落葉病ふ治郎老ふ小倉山  
起て麻て結よ木の葉のしれ外  
枝晴きて木影一羽おら葉外  
枝と枝をのこをさるる落葉外  
見ふかか糸菴りのおらとら  
豆腐は尾は翳れし落葉うら  
小鹿子休んで通る落葉外  
一志めま今年の卯のおらとら

蓮之

雪朝

梅鶏

東閣

吳竹

涼宇

紅夕

漁光

鈴角

李條

十善門

十善門

十善門

わー飛して尺並て是迄の本葉外  
友とれの言妙き竹のちらしし  
さぬくの坑八所 屋葉外  
郡山夕秋 溶く

天の不測のそあり人子聖妻の質あり  
今夢芥よませしむ

屋葉の上と下タノ雀ウネ  
禁いのそ月の雨禁り却葉くれ  
溜りの底を流るる屋葉外  
玉全  
沾涼  
千本

雪

うつらや神雪の海、牛乃角  
白姑やよと魚て七墨あめ言  
白炭の言妙き雪の料理福  
きぬの肌のを越る雪終心  
長水  
賀朝  
千洗  
雪朝

まり幕や五つうらまの言あ  
うつるよかひくあや比翼楫  
うつるよか根葉あ行のあ  
其孫  
扇的  
有林

顔又世

顔又や方十所ハ正月気  
あらし折冬至の梅は神葉露  
顔又や言妙き娘かよふ  
夕佳  
露庭  
魚路

拈野

あらしの言妙きあらしの言  
さらしの言妙きあらしの言  
拈野の言妙きあらしの言  
あらしの言妙きあらしの言  
東隣  
百二  
布仙

OF

ふゆのきくた出るる外

千鳥

吳竹

菊の秋の葉に叶ふ外

五百武

眠るるを吾輩習ふ東の漢を

改定

傘車

さしたるを動泳ておむ漢を

樓川

唱て居る物を御す外

沾涼

紅夕

毎房をえと紙を厚す外

布仙

蚊けしらのきをえらる外

楚殊

寒

技志くく春のふれこびる

未石

黄蘗の種のみきもさびる

万里堂

五百武

雪よ氷回根生乃きさる

十萬門

鵬角

秋のふりまへるるを

蓮の葉や花してもおれにの中 露言門 尺草

高集兼海の初尺草老人の一集の首級をひらいて  
あるきりやをそよ老人をまらうや 古人よあつた  
ありと感懐せらるる二千集年ものふりまへるる  
くしとあつたふりまへるる加へんや  
白を海と知れはすなりは八十集年ものふりまへるる  
古人の部よ入るるゆりまへるるなりまへるる  
のま此不遠のふりまへるる在るるなりまへるる

生植

京宗臣

石壽菴

水松や馬より様も抱かる

暮四

茶の花や尺知るる如梅のむ

沾梅

しつりといふふりまへの梅を

雲門

吟竹

枝を葉子見うら分つ水松花

溶く

水松のみを海えなり女武者

雜冬

障子子ハ縁子をたてて冬梅  
 足跡のそとよりきみみそん外  
 誓死して松の腕を冬乃滝  
 炭俵あさくや人を八王子  
 しのあまを楠云信 若汁  
 おうーやまのそーの二里抗  
 おうー乃色や鹿のうーる石  
 芳ふありひよと云嬉し衣配里  
 汲ふごす妹のふととや淀八裾  
 羊尾  
 明日多ん乳をえたと福壽子  
 沾涼  
 布仙  
 有佐  
 梅五  
 安祖  
 千露  
 好夕  
 沾涼  
 左隣  
 菖蒲

人丸大明神聖像

宗祇法師恭敬像  
 杉白木御長五寸五分  
 頓阿法師作 任吉奉納一軀  
 御筆後以岸姫松作之

此正一位乃る像ハ頓阿法師の作宗祇法師の教  
 乃る像にして宗祇のついでに伊賀國上野飯東氏  
 喜三生國尾川清洲織田家士ハ宗祇の門人なり  
 後爲醫費居伊賀國  
 乃る像ハ淵屬一具政安湘左衛門落後  
 号三悦沾涼父  
 湯子而後服部土芳半左衛門ト云ハ  
 芭蕉高弟にあつて羊角  
 二十余年以宗室永のころ予故邸に執る

初世傳を尋ねるゝ土方も早古人し毒ゆ  
子なり誰にやういふはありは政安の云土方乃  
甥本津宗七郎とて名をあらわすも通つてそ  
同小宗七云土方在世の時以脚外く北余日そ  
より連洲より海にありて後彼傳を語嗟して  
賦詩一笈より介してそそ人のとてあま  
天神の宝號ありとて出とそ人の紙子

天満宮宝號一幅 山崎宗鑑筆 山口不貫書

記しそと路すふてゆくは長門  
人かきしし于時享保十四巳酉八春道芝と云  
小うりふのり人北爪倫仙条之助ト云い、  
沾涼門人い、  
我の人の名は傳あり是れは芝にありて連歌師

乃下指りて謂ある傳し連歌の會ふとい  
杖をふりてそを削りしゆも流しし  
今の我の應せとてはゆふあへりか新道  
五月廿二日倫仙世傳をとりてそをいふそ我  
ありて全わし感合のあふありてそをい  
辭してそつくの事をつれにんそ海あり  
そのとら人の名を問ぬ是山口不貫生國長門國藩州  
享保十四巳酉七月卒  
于時七十二門人丹野紫柳 道芝ノコし受とてそ  
そをいふそ歸影なりそをいふそ信介とて  
まの茅屋いそそをいふそそのかそそ當所  
熊手神田宮の境内に遷座かそそをいふそ

雀下菴謹書

人店七月神法樂

影うつすくも新樹乃高角山 雀菴源  
硯より石見の出く 朝清の  
床一さやほのくの帆、ねの肩 同 梅立

造立の連各法樂

六の神の鳥帽子なりしや白牡丹 宙川未若  
帆かやこの海や茂るや神の砥 笠井 露  
去る由の月一葉し花外本 中島立良  
初より井 あまに浮くや雲の峰 河津玉風  
とん垣もあまの華の唯作り 小森苗之  
みきりしやみくたも通も花きぬ 岩田冷之  
時とてやまもとくもこれ神標 北元倫仙

ゆかしくや秋の神話のや一竹 久米田智朝  
神詠いささくも一ほくさん 北尾千洗  
ゆるそくに唯るのまゝあまの風 栗本雪朝  
時見一唯今在、ゆかしくの笑 川勝文岳

○枋本人丸 <sup>古今</sup>七の文字のりたる石見國戸田郡の

人家の枋の末のそまのり童形を七出祝しなり

石見國より化生まると云事 口史

神龜元年三月十八日年 口史

持統帝文武帝聖武帝平城帝との沙るは  
式人の云其御家ほくり古今の事その集凡

中の舞もみたるふれい想えんまことしたるま  
 古今集の中のみやあゝぬきやむいしとまき  
 事をぬるに大おの事とて作しきしに後藤物治  
 乃中のみやあゝぬきやむいしとまきとて  
 るをぬるにしつゝあゝぬきやむいしとまき  
 かくれは事なり

人唐四人多 扶事人唐 白人唐 手事人唐 押海人唐  
 あゝぬきやむいしの人なり

十一部三巻 16巻 17巻 18巻

泊涼子の後綴彼機と建家考の始  
 誹祖以来當世に至る門弟と携家  
 宗近の流々といひ一匡一  
 系譜と詳に述べていて  
 次に古往此明師より累世に先達  
 及現在作者の教句集くふれと  
 緯とて一最後に句合歌仙等



微々此雜支と彼々一々く控候  
 ありはるる一々きり古風の公道あり  
 中比の伊達家今此地好漢の事  
 あり一々吟嘯乃流眸と好くささ  
 取はる家地あり一々やま一々云爾  
 涼子の請ふ後て野叟卜宅漫に  
 跋寸頗鄙陋と願ふ而已

山水徴

雲室上人縮圖

全一冊

此書ハ唐画ヲ学ブ人ノ為ニ明ノ世ニハ唐伯虎文徴明董其昌  
 ヲ初メトシ又清朝ニテハ王鼎錢席孫師昌ナド云ル名人ヲ先トシ其餘明清  
 兩朝諸名家ノ画キ置シ山水圖真跡ノ中ニテ初学ノ人画ヲ成ヌニ手本トナル  
 ベキヲ縮圖セラレシ小冊ナレバ画ヲ好ム君子ハ必坐右ニ置ベキ書也

文政八乙酉年仲殊

本石町十軒店

江戸書林

層山堂 西村宗



